

日本・朝鮮・台湾のアリドオシ属

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-11-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 敬, Yamazaki, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00056059

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



山崎 敬*：日本・朝鮮・台湾のアリドオシ属

Takashi YAMAZAKI*：The Genus *Damnacanthus* in Japan, Korea and Taiwan

アリドオシ属は主に日本・中国に分布し、朝鮮、ラオス、アッサムにも広がり、9種ほど知られる小さい属である。日本には3—4種あるが、分類上の特徴が少なく、また葉の形や大きさ、刺の有無や長さに変化が多く、人によって見解が異り、和名も混乱している。実態を把握するには、現地での生品による十分な調査を行はねばならないが、まだそうした調査は行われていない。しかし最近、初島氏の見解が発表されたりしているので、一応のまとめをしてみたいと思う。日本で種類として現在使われているのは、ジュズネノキ *D. macrophyllus* SIEB. et ZUCC., リュウキュウアリドオシ *D. biflorus* (RHED.) MASAMUNE, アリドオシ *D. indicus* GAERTN. f., オオアリドオシ(ニセジュズネノキ) *D. major* SIEB. et ZUCC. の4種である。最近、初島住彦氏は琉球から1新種ヤンバルジュズネノキ *D. okinawensis* HATUSIMA を加えている。

この属は和名が混乱していて、それから検討する必要がある。上記の和名は一応の目安として挙げたもので、人によって異なる。牧野富太郎氏(日本植物

図鑑, 1940) は *D. major* をジュズネノキとし、*D. macrophyllus* はジュズネノキでないことわつてある。小泉源一氏(植物分類地理 2: 225, 1933), 高橋真太郎氏(植物分類地理 20: 101, 1962) は *D. macrophyllus* をジュズネノキとし、*D. major* はニセジュズネノキとしている。北村・村田氏(原色日本植物図鑑, 1971) は、*D. macrophyllus* にオオバジュズネノキ、*D. major* にニセジュズネノキを使い、両者の異名にジュズネノキの名を挙げている。こうした違いが起こるのは、江戸時代にジュズネノキと呼んでいたものが何にあたるかの解釈の違いからきている。牧野氏と高橋氏では全然解釈が異り、北村・村田氏は折衷案といえるであろう。江戸時代の文献はいくつかあるが、論争の基礎になっているのは平賀源内の物類品隋(1763)と岩崎灌園の本草図譜(1830)の図である(図1)。

江戸時代には *D. macrophyllus* にジュズネノキの名を当てていたようである。FRANCHET et SAVATIER: Enum. Plant. Japon. (1875) では発音は少し異なるが *D. macrophyllus* にジュズネノキを



図1. 左, 平賀源内: 物類品隋 (1763)。右, 岩崎灌園: 本草図譜 6巻 (1830)。

* 東京大学理学部付属植物園 Botanical Gardens, Faculty of Science, University of Tokyo, 3-7-1, Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo 112.

D. major にオオバノアリドオシの和名を使っている。矢田部・松村氏の日本植物名彙(明治15年, 1882)でもそうである。ところがその10数年後の松村氏の訂正増補・日本植物名彙(明治28年, 1895)では *D. major* をジュズネノキとし, *D. macrophyllus* にオオバジュズネノキの名を使いはじめた。その理由は書いてないが, 牧野富太郎氏(植物学雑誌11: 279, 1897)が松村氏と同じ扱いの論文を書いているし, 前記の日本植物図鑑の記事からも, 平賀, 岩崎氏の図を *D. major* と判断したことによると考えられる。松村氏が *D. indicus* var. *intemedius* という中間型の名をもつ変種を書かれたのも, 沖縄の刺の短いものが, アリドオシと円葉型の *D. macrophyllus* (松村氏はこれを *D. major* と考えた) の中間型であるとしたことによると思われる。

小泉・高橋氏はそれは誤りで, 両図は共に *D. macrophyllus* であるとしたのである。高橋氏は *D. macrophyllus* は根が肥厚しイヌリンをもつが, *D. major* は根が肥厚せずイヌリンをもたない, これが両種を区別する大きな特徴であるとされた。イヌリンの有無は貯蔵物質を根に貯えるかどうかの問題で, 根が肥厚するかしないかと同じことを意味すると思うが, 根の形態は両種を区別する重要な特徴である。*D. major* の根は肥厚しないことから, 小泉源一氏(1933)はこれにニセジュズネノキの名をつけている。

これらがどうしてこのように問題にされ, 江戸時代に立派な図まで描かれているのかというと, 漢方薬に巴戟天という植物があり, 江戸時代にこれがカキノハグザであるという説と, ジュズネノキであるという説があったのである。現在では巴戟天は中国南部のアカネ科の植物 *Morinda officinalis* HOW であるとされているようであるが, 平賀氏はジュズネノキと考え, 岩崎氏は巴戟天としてナガバジュズネノキを描き, ジュズネノキはそれに近いものとして図を描いているのである。現在中国西部の *D. officinarum* HUANG も巴戟天とよんで栽培しているというから, そう見当違いでもない。平賀氏の図は地下部と地上部は別々に描かれている。地下部は *D. macrophyllus* であるが, 地上部は葉の形や長い刺をもつ点で牧野氏のいわれる様に *D. major* として間違いないであろう。ただ地下部まで *D. major* とするわけにはいかない。平賀氏は資料を九州から得ているが, 送った人が混同していたのであろう。岩崎氏の図は地上部も地下部も一続きのものとして描いている。別にナガバジュズネノキも描いているから, 両者を区別しているわけであるが, 共に地下部は肥厚している。前者は葉がやや小型で広楕円形であり, 後者の葉は狭楕円形である。前者は天城山

からのもので, 後者は九州産であると記されている。現在 *D. macrophyllus* は愛知県以西の分布で, 静岡県からは知られていない。

東京大学の標本室には, 明治12年(1879)と明治15年(1882)に小石川植物園で栽培され, ジュズネノキとよばれていた標本が保存されている。これは葉が卵状楕円形で岩崎氏の図より少し細い。MAXIMOWICZ氏が江戸で栽培されていた生品をもちかえり, セント・ペテルスブルグ(レーニングラード)で栽培した *D. major* SIEB. et ZUCC. var. *submitis* MAXIM. の図がある(Gartenfl. 17: t. 570, 1868)。この学名は現在 *D. macrophyllus* の異名とされているが, この図は小石川植物園で栽培されていたものとよく似ている。*D. macrophyllus* SIEB. ex MIQUEL (1867) の標本を SIEBOLD 氏がどこから入手したか不明であるが, 記載や原標本の写真からみると MAXIMOWICZ 氏や小石川植物園のものに似ている。野生ではナガバジュズネノキが普通で円葉型のもの珍しいけれど, 江戸では円葉型のものでジュズネノキとして栽培されていたようである。*D. macrophyllus* の葉の形は変化に富むので, 岩崎氏のジュズネノキもその一型として *D. macrophyllus* とみた方がよいと思う。当時は薬用植物がかなり重要な位置を占めていたのだから, 根の肥厚しない *D. major* をジュズネノキと誤って描くとは考えられない。

以上のように *D. macrophyllus* には小泉, 高橋氏が主張するように, 江戸時代に帰ってジュズネノキの名を使うのがよいと思う。そうすると *D. major* の名は小泉氏(1933)のいうニセジュズネノキになる。しかし前記 FRANCHET et SAVATIER 氏の本(1875)には田中芳男氏がオオバノアリドオシとよんでいると書いている。これを使うべきだと考えるが, 変種のホソバニセジュズネノキを呼ぶ時不便なので, オオアリドオシと縮めたい。以下この名を使用する。またジュズネノキの名は根が肥厚する *D. macrophyllus* のみに限り, 他はアリドオシの名を使用するのが妥当と思う。

ジュズネノキ *D. macrophyllus*: 上述した様に, 根が肥厚し, 葉は大きく, 刺はないか, あってもごく短い。種類として認められるものである。基本種は葉が卵状楕円形または楕円形である。しかしこの形はまれで, 一般には葉が長楕円形のナガバジュズネノキであるが, 両者は連続的で明瞭に区別できず, 分布も異ならない。岩崎氏の図に見られる様なマルバジュズネノキ *D. moniliformis* も含めて, ジュズネノキ f. *macrophyllus* と, ナガバジュズネノキ f. *giganteus* の品種程度の区別でよいのでないかと思う。本州の愛知県, 近畿以西, 四国, 九州本島に分

布する。屋久島には今後見付かるかもしれないが、奄美大島以南には分布しない。アリドオシの変種として扱われることもあるが、別種とするのが妥当である。四川の峨眉山にある *D. officinarum* HUANG が葉は小さく厚いけれど近縁のものと思われる。

リュウキュウアリドオシ *D. biflorus* : 全体無毛で、葉は厚く裏面にツヤがあり、裏面の側脈はほとんど目立たない。刺はないかあってもごく短い。枝が分岐すると、その第一節には葉も刺もなく托葉だけであり、次の節に葉と刺がでる。根は肥厚しない。最も特徴的なのは、若枝が全く無毛なことである。他の種類は若枝に短毛がやや密にはえている。奄美大島、徳之島、沖縄本島に分布する。

アリドオシ *D. indicus* : 丈は20—60 cm で小さく、葉は一般に卵形であるが、卵状楕円形、楕円形と変化が多く、長さ7—20 mm、幅6—12 mm で小形である。刺は長さ7—20 mm、葉の2/3より長い。この属の中では分布が最も広く、本州の関東地方以西、四国、九州、朝鮮南部、中国大陸中部南部に広がり、アッサムにもあるという。九州では南は徳之島付近までで、沖縄本島からも報告があるが確認していない。台湾にあるものは葉が狭卵形で、下部1/4ほどの所が最も幅が広く、アリドオシが中部の少し下から下部1/3ほどの所が最も広いのと異なり、変種 *var. formosanus* として区別される。葉が狭卵形のもは琉球にも見られるが、幅の広い位置が異なる。

アリドオシは葉の大きさや形に変化が多くヒメアリドオシ、タマゴバアリドオシなどいくつかの変種が区別されるが、多くは一定の分布区域があるわけではなく、中間形もあって区別しがたい。個体変異または生態型と思はれる。ただヒメアリドオシは刺が長いのに葉が小さくて目立つ形をしていて、分布も紀伊半島、四国、九州と太平洋側に偏っていて、やや特定の分布区域が存在するし、奄美大島、徳之島のもは殆どヒメアリドオシの型である。アリドオシと明確に区別することはむずかしいが、一型として区別することはできる。これとアリドオシとの関係は今後の調査が必要である。

オオアリドオシ (ニセジュズネノキ) *D. major* : この属の中では最も変化が多く、分類の難しい一群である。アリドオシに似るが、やや丈が高く0.5—1 m、葉はやや大きく、長さ1.5—5 cm、幅0.8—2 cm、刺は短く、長さ2—10 mm で、一般に葉の長さの半分以下である。本州の関東地方南部以西、四国、九州の常緑樹林下にはえ、朝鮮(濟州島)にも分布する。琉球のもは本州のものと同様異なり、薄いものもあるが葉は一般にやや厚くて裏面の脈が目立たず、下部から1/3ほどの所が最も幅が広い傾向があってほぼ卵形であり、刺の短いものが多い。本州

のもは葉が中ほどからやや下の所で幅が広い傾向があり、卵状楕円形のものも多く、やや薄く裏面の葉脈が目立つ。松村氏が沖縄から書かれた、*D. indicus* var. *intermedius* がこれに当る。ただその基準標本は葉が薄く裏面の脈が目立つが、葉の形は琉球の一般のものと同じである。葉の下部の幅が広がる傾向がさらに進んだのが台湾のものと考えられる。琉球のものと同州のものとの上記の差異は微妙で、本州にも琉球のものに似た個体もあり、傾向は存在するけれども明確な区別はつけられない。初島氏(1986)は変種とすべきだとされているが、本州・四国・九州のものと同じに扱うのが妥当でないかと思う。

オオアリドオシをアリドオシから区別する上記のような性質はいずれも量的なものであって、アリドオシとの区別は明瞭でない。日本国内と朝鮮での分布は両者とも同じで、生育場所もほとんど異ならず、アリドオシがやや乾いた場所で、オオアリドオシが日陰の空中湿度のやや高い場所といった傾向がありそうにも感じられるが、明らかに異るとはいいがたい。ただ国外での分布はいささか異なる。オオアリドオシは琉球諸島にも分布し、その南の限界は西表島であり、尖閣諸島の魚釣島にもみられる。一方アリドオシの国内での南の限界は徳之島であって、沖縄本島以南にはみられない様である。しかし中国大陸ではアリドオシは中部、南部に広く分布していて、そう珍しいものではない様であるが、オオアリドオシは今の所みつつかっていない。アリドオシとオオアリドオシとのこうした分布の違いは、両者の分化と分布に、歴史的な背景のあることを想像させる。両者は分化の程度の弱い別種として扱ってもおかしくないが、質的な差異がない以上、亜種の関係にあるものとして扱うのがより妥当だろうと思う。両者の関係は今後の研究を必要とする。

オオアリドオシの中には4変種が記録されている。コバノニセジュズネノキ var. *parvifolius*, オオシマアリドオシ (ビシンニセジュズネノキ) var. *parvispinus* ビビシンニセジュズネノキ var. *minutispinus*, ホソバニセジュズネノキ var. *lancofolius* である。このうち、三重県と琉球の標本をもとに、刺の長さの変化によってつけられたビビシンニセジュズネノキは区別する必要がないと思う。刺の長さは変化が多く、せいぜいアリドオシとオオアリドオシの区別に使う程度にとどめるのがよいと思う。コバノニセジュズネノキは北村・村田氏(1971)がアリドオシとオオアリドオシの雑種でないかとしている。葉の形はオオアリドオシに似るが、刺が長く葉の長さの半ばまたはより長く、アリドオシとオオアリドオシとの中間的な形である。中井猛之進氏

(大日本樹木誌 2版I : t.247, 1927)のコバノジュズネノキの図もこれである。この形は日本国内に広く見られ、中間形ではあるが、交雑によるものか、刺の変異のひとつなのかはきめがたい。ただ、コバノニセジュズネノキの基準標本は、葉が小さく、刺が葉と同長かより長くてアリドオシそのものの様に思える。

ホソバオオアリドオシ(ホソバニセジュズネノキ)は、葉が長楕円形または披針状長楕円形、長さ3—5.5 cm、幅1—2 cmで細くて大きく、特徴のある形をしている。分布は静岡・愛知・三重・福井・京都・奈良・島根の各県に点々と広がっている。葉の形はオオアリドオシとの間に連続するものも見られるが、変種として区別してよいものである。

オオシマアリドオシ(ビシンニセジュズネノキ)は葉が小さくて細く、厚くて裏面の葉脈が目立たず、刺も短い。高橋真太郎氏はこれをジュズネノキ *D. macrophyllus* に移したが、根が肥厚しないのでこの見解は成り立たないと思う。琉球系のオオアリドオシは葉が厚く脈が目立たないので、オオシマアリドオシのように葉が小さくなるとそれは一層目立ってきて、内地のものとは著しく異なるものに見える。葉が小さくなると共に、枝の第一節の葉の発達が悪くなる個体が多くなる。この点はリュウキュウアリドオシに似た性質になるが、若枝に毛が密にはえるので異なる。コバノオキナワアリドオシ *D. angustifolius* subvar. *microphyllus* HATUSIMA (琉球植物誌: 572, 1971)は正式の発表はされていないけれど、鹿児島大学の標本を見ると、奄美大島のものが基準標本とみられ、オオシマアリドオシと同じものである。台湾の *D. angustifolius* は葉が薄くて大きく、オオシマアリドオシとは関係なく、雲南・ラオスの *D. tsaii* に関係があると思う。オオシマアリドオシはナガバアリドオシと同様にオオアリドオシとの間に中間型があるようにもみえるが、オオアリドオシの変種として扱いたいと思う。奄美大島と沖縄本島に分布し、溪流にはえることが多いという。

ヤンバルアリドオシ(ヤンバルジュズネノキ) *D. okinawensis* HATUSIMA: 琉球のアリドオシ属の分類は非常にむずかしい。リュウキュウアリドオシとオオアリドオシがある他に、新たに本種が加えられた。リュウキュウアリドオシに似ていて、その葉をやや小さくしたようなものであるが、リュウキュウアリドオシは若枝や葉柄は全く無毛であるのに対し、本種は若枝や葉柄に短毛がやや密に生えている。また枝の第一節には多くは葉ができる。この点はオオアリドオシに似る。しかしオオアリドオシからは、葉がやや厚くて細長く、裏面にやや照りがあり、葉柄が長い点で異なる。この特徴はリュウキュウアリド

オシの性質である。丁度リュウキュウアリドオシとオオアリドオシとの中間的な形をしているのである。この点はヤンバルアリドオシの性格を考えるにあたって重要なことである。ヤンバルアリドオシは沖縄本島の中部北部・徳之島・奄美大島に分布していて、リュウキュウアリドオシの分布範囲と全く同じであり、また生育場所も同所的である。これらの地域にはオオアリドオシも生育しているので、ヤンバルアリドオシはオオアリドオシとリュウキュウアリドオシとの交雑種であろうと考えられる。交雑であるために、オオアリドオシに近いものからリュウキュウアリドオシに近いものまで色々な変化があり、琉球のこの属の分類をむずかしくしているものと考えられる。ヤンバルアリドオシはどちらかというところオオアリドオシに近く、同時に報告されたリュウキュウジュズネノキ *D. indicus* GAERTN. f. var. *okinawensis* HATUSIMA はリュウキュウアリドオシに近いと思われる。

この論文を書くにあたり、ヤンバルジュズネノキの基準標本を含めた多数の琉球の標本を貸して下さった、琉球大学の島袋敬一氏と同研究室の方々、また *D. macrophyllus* の基準標本の写真を撮って下さった加藤雅啓氏に深謝いたします。

From the critical revision of the genus *Damnacanthus* in Japan, Korea and Taiwan, four species, including one subspecies, three varieties and three formae are recognized. They are distinguished as follows:

- A. Branches without spines, young branches glabrous; petioles 2-7mm long, glabrous.
- B. Branches obscurely angled; leaves coriaceous, oblong, elliptic or ovate, 2-6cm long, 1.3-3cm wide, shining beneath, veinlets obscure1. *D. biflorus*
- B. Branches 4-angled; leaves membranous, linear-lanceolate, lanceolate or oblong, 5-12cm long, 0.5-3cm wide, not shining beneath, veinlets conspicuous2. *D. angustifolius*
- C. Leaves lanceolate to oblongf. *angustifolius*
- C. Leaves linear to linear-lanceolatef. *stenophyllus*
- A. Branches with or without spines, young branches pubescent; petioles 0.5-3mm long.
- B. Roots moniliform; branches without or with very short spines; leaves oblong, elliptic or ovate, 4.5-10cm long, 1.8-3cm wide; petioles 1-3mm long3. *D. macrophyllus*
- C. Leaves ovate or elliptic-ovate, 3-6cm long

-f. *macrophyllus*
 C. Leaves oblong to elliptic, 6-10cm long
f. *giganteus*
- B. Roots filiform, not moniliform; branches with conspicuous spines of 2-20mm long; leaves various, 0.7-6cm long, 0.4-2cm wide; petioles 0.5-1mm long4. *D. indicus*
- C. Spines 7-20mm long, at least longer than 2/3 of the leaf-length; leaves 0.5-2cm long
subsp. *indicus*
- D. Leaves ovate or orbicular-ovate.
 E. Leaves 1-2cm longvar. *indicus*
 E. Leaves 0.5-1cm long
var. *macrophyllus*
- D. Leaves triangularly lanceolate or lanceolate-oblongvar. *formosanus*
- C. Spines 2-10mm long, generally shorter than 2/3 of the leaf-length; leaves generally 2-6cm longsubsp. *major*
- D. Leaves elliptic or elliptic-ovate
var. *major*
- D. Leaves lanceolate, lanceolate-oblong or narrowly oblong.
 E. Leaves narrowly oblong, 3-6cm long, 1-2cm widevar. *lanceifolius*
 E. Leaves lanceolate or lanceolate-oblong, 1-3cm long, 0.7-1cm wide
var. *parvispinus*
1. *D. biflorus* (REHD.) MASAMUNE リュウキユウアリドオシ
 MASAM., in Mem. Fac. Sci. Agric. Taihoku Univ. Bot. 4: 5 (1934), HARA, Enum. Sper. Japon. 2: 2 (1952), HATUSIMA in J. Phyt. Taxon. 34: 9 (1986).
Tetraplasia biflora REHD. in J. Arn. Arb. 1: 190 (Feb. 1920).
Damnacanthus tashoroi HAYATA in Ic. Pl. Formos. 9: 65 (Mar. 1920).
Tetraplasia luchuensis KOIDZ. in Act. Phyt. Geobot. 3: 161 (1934).
Damnacanthus luchuensis (KOIDZ.) HATUSIMA in J. Jap. Bot. 14: 237 (1938).
Damnacanthus biflorus (REHD.) MASAM. var. *luchuensis* (KOIDZ.) WALKER in J. Jap. Bot. 46: 69 (1971).
D. angustifolius HAYATA var. *luchuensis* (KOIDZ.) HATUSIMA, Fl. Ryukyu: 572 (1971), nom. tant., excl. specim.
 Distr. Kyusyu (Is. Amamiyoshima and Is. Tokunoshima), Ryukyu (Is. Okinawa).
2. *Damnacanthus angustifolius* HAYATA
 HAYATA in J. Coll. Sci. Univ. Tokyo 30: 113, t. 15 (1908), J. M. CHAO in Fl. Taiwan 4: 257 (1978).
 Distr. Taiwan.
 f. *stenophyllus* (KOIDZ.) YAMAZAKI, stat. nov.
Tetraplasia stenophylla KOIDZUMI in Act. Phyt. Geobot. 3: 160 (1934).
Damnacanthus stenophyllus (KOIDZ.) MASAMUNE in Short Fl. Formos.: 201 (1936).
D. angustifolius var. *stenophyllus* (KOIDZ.) MASAM. in Trans. Nat. Hist. Soc. Formos. 28: 119 (1938).
 Distr. Taiwan.
3. *D. macrophyllus* SIEB. ex MIQUEL. ジュズネノキ
 MIQ. in Ann. Mus. Lugd.-Bat. 3: 110 (1867), HARA, Enum. Sp. Jap. 2: 3 (1952).
D. major SIEB. et ZUCC. β *submitis* MAXIM. ex REGEL in Gartenfl. 17: 35, t. 570 (1868).
D. major SIEB. et ZUCC. var. *macrophyllus* (SIEB.) MAXIM. in Bull. Acad. Sci. St.-Pét. 29: 171 (1883).
D. indicus GAERTN. f. δ *macrophyllus* (SIEB.) MAKINO in Bot. Mag. Tokyo 11: 279 (1897).
D. moniliformis KOIDZ. in Act. Phyt. Geobot. 2: 225 (1933), 3: 159 (1934).
 Distr. W. Honsyu, and Kyusyu.
 f. *giganteus* (MAKINO) YAMAZAKI, stat. nov.
 ナガバジュズネノキ
D. indicus GAERTN. f. γ *giganteus* MAKINO in Bot. Mag. Tokyo 18: 33 (1904).
D. giganteus (MAKINO) NAKAI in Tr. & Shr. Jap. ed. 1: 421, t. 215 (1922).
D. macrophyllus SIEB. var. *giganteus* (MAKINO) KOIDZ. in Act. Phyt. Geobot. 3: 159 (1934).
 Distr. W. Honsyu, Shikoku and Kyusyu.
4. *Damnacanthus indicus* GAERTN. f.
 GAERTN. f., Suppl. Carpol.: 18, t. 182, f. 7 (1805), HARA, Enum. Sperm. Japon. 2: 2 (1952).
 subsp. *indicus* アリドオシ
D. major var. *parvifolius* KOIDZ in Bot. Mag. Tokyo 39: 4 (1925).
D. indicus var. *parvifolius* KOIDZ. ex NAKAI, Tr. and Shr. Jap. ed. 2: 546 (1927), pro parte, excl. fig.
D. indicus var. *ovatus* KOIDZ. in Act. Phyt.

Geobot. 2: 225 (1933), 3: 157 (1934).

Distr. C and W. Honsyu, Shikoku, Kyusyu, S. Korea (Is. Cheju Do) and C. and S. China.

var. *microphyllus* MAKINO ヒメアリドオシ
MAKINO in Bot. Mag. Tokyo 6: 55 (1892),
nom. nud., NAKAI, Tr. and Shr. Jap. ed. 2: 542,
t. 245 (1922).

D. indicus f. *microphyllus* MAKINO in Bot.
Mag. Tokyo 18: 31 (1904).

Distr. Honsyu (Mie and Wakayama pref.),
Shikoku (Kouchi pref.) and Kyusyu (Is.
Tushima, Is. Yakushima, Is. Amamiohshima
and Is. Tokunoshima).

var. *formosanus* NAKAI, Tr. and Shr. Jap. ed.
1: 407 (1922), ed. 2: 543 (1927).

D. formosanus (NAKAI) KOIDZ. in Act. Phyt.
Tax. 2: 225 (1933).

D. indicus auct. non GAERTN. f.: CHAO, J.
M. in Fl. Taiwan 4: 258, t. 992 (1978).

Distr. Taiwan.

subsp. *major* (SIEB. et ZUCC.) YAMAZAKI, stat.
nov. オオアリドオシ (ニセジュズネノキ)

Damnacanthus major SIEB. et ZUCC. in Abh.
Acad. Muench. 4: 177 (1846), HARA, Enum.
Sperm. Jap. 2: 4 (1952).

D. indicus γ *major* (SIEB. et ZUCC.) MAKINO
in Bot. Mag. Tokyo 11: 279 (1897).

D. indicus var. *intermedius* MATSUMURA in
Bot. Mag. Tokyo 15: 16 (1901), pro major
parte., HATUSIMA in J. Phyt. Taxon. 34: 9
(1986).

Damnacanthus minutispinus KOIDZ. in Act.
Phyt. Geobot. 4: 158 (1935).

D. major var. *minutispinus* KOIDZ., l. c. in syn.

D. lancifolius var. *oblongus* KOIDZ. in Act.
Phyt. Geobot. 2: 225 (1933), 3: 158 (1934).

Distr. C. and W. Honsyu, Shikoku, Kyusyu,
Ryukyu and S. Korea (Is. Cheju Do).

var. *lancifolius* MAKINO ホソバオオアリドオシ
(ホソバニセジュズネノキ)

MAKINO in Bot. Mag. Tokyo 18: 33 (1904).

D. lancifolius (MAKINO) KOIDZ. in Act. Phyt.
Geobot. 2: 225 (1933), 3: 158 (1934).

D. major var. *lancifolius* (MAKINO) OHWI in

Fl. Jap. ed. 1: (1948).

Distr. W. Honsyu (Aichi, Mie, Nara, Kyoto,
Fukui, Simane).

var. *parvispinus* KOIDZUMI オオシマアリド
オシ (ビシンニセジュズネノキ)

KOIDZUMI, Pl. Nov. Amami-Ohsima: 6
(1928), in Act. Phyt. Geobot. 1: 166 (1932).

D. major SIEB. et ZUCC. var. *parvispinus*
KOIDZ. in Act. Phyt. Geobot. 2: 225 (1933), 3:
159 (1934).

D. macrophyllus SIEB. var. *parvispinus*
(KOIDZ.) TAKAHASHI in Act. Phyt. Geobot. 20:
100 (1962), pro minor parte.

D. angustifolius HAYATA var. *luchuensis*
(KOIDZ.) HATUSIMA subvar. *microphyllus*
HATUSIMA, Fl. Ryukyus ed. 1: 572 (1971).

Distr. Is. Amamiohshima and Is. Okinawa.

5. *Damnacanthus okinawensis* HATUSIMA ヤン
バルアリドオシ (ヤンバルジュズネノキ)

(*D. biflorus* × *D. indicus* subsp. *major*).

HATUSIMA in J. Phyt. Taxon. 34: 9 (1986).

D. indicus var. *okinawensis* HATUSIMA in J.
Phyt. Taxon. 34: 9 (1986).

Distr. Kyusyu (Is. Amamiohshima, Is.
Tokunoshima), Ryukyu (Is. Okinawa).

Note. Dr. Takashi TUYAMA. collected a plant
of *Damnacanthus* in Laos. This is determined to
be *D. tsaii* HU, which is distributed in Yunnan and
newly found in Laos.

Damnacanthus tsaii HU in Bull. Fan. Mem. Inst.
Biol. 6: 178 (1936), H. S. LO in Act. Phyt. Sin. 17,
no. 3: 106 (1979).

Hab. Laos: Ban Phu Phao, ca. 25km N. E. of
Phongsare, under the forest at the top of Mt. Phu
Phao, about 2000m (T. TUYAMA, Jan. 1, 1958, no.
L57291, TI).

The specimens differ from the typical form of
D. tsaii by spines short 2-8mm long, leaves ovate
or narrowly ovate 2-5cm long 0.8-2.2cm wide,
lateral veins 4-6 paired. However, these
characters are included in the interpretation of H.
S. LO for *D. tsaii*.

(Received June 4, 1987)

○ 井波一雄 いまむかし暮らしの小道具・植物事典 毎日新聞社, 昭和60年10月発行。17.1×11.5 cm,
222頁。980円。“アオミドロの手まり”に始まる209項目は、それぞれに楽しい。序文の一部に、“美しい心の
日本をふりかえり、草笛にただようふるさとのうたを今に蘇らせる望みを託してこゝにまとめた”とある。必
読されたい。(里見信生)